

トピック まなづるの海

地域の子どもたちが海洋調査を体験

11月17日(日)に「真鶴自然子どもクラブ」を開催しました。このイベントは、真鶴と湯河原の子どもたちが、遊びや体験を通して地域の自然を学ぶプログラムで、年に4回開催しています。今回は「海の研究をたいけんしよう！～横浜国立大学実習船体験乗船～」と題し、真鶴町内にある横浜国立大学臨海環境センターの協力のもと、実習船「たちばな」に乗船し、試料採集やプランクトンの観察など、大学生や研究者さながらの海洋調査を体験しました。



実習船「たちばな」での試料採集の様子(上)、臨海センターでのプランクトン観察(下左)、観察したプランクトン(下右)

当日は比較的穏やかな海況だったものの、慣れない船上での作業で船酔いになる子どももいました。それでも、表層および水深10、40、70、100mの各深度の採水と水温測定、目合いの異なるネットを用いたプランクトン採集を無事に完了し、帰港しました。

臨海センターに戻ってからは、海水中に溶けている塩分を測定し、水温と合わせて海洋環境の調査に重要なデータを得ました。プランクトンの顕微鏡観察では、岸付近よりも大型種の多い沖合の動物プランクトンの姿や、繊細な植物プランクトンの美しさに驚きの声が上がっていました。計測機器や顕微鏡に真剣に向き合う子どもたちの様子は、まるで小さな海洋学者のようでした。

イベントの最後には、横浜国大の下出准教授から、真鶴周辺の海洋環境や、プランクトンを起点とした海の生態系について説明いただきました。子どもたちはもちろん、参加した保護者からも多くの質問があり、今回の体験を通して地域の海への興味が深まったことがうかがえました。

真鶴の海況

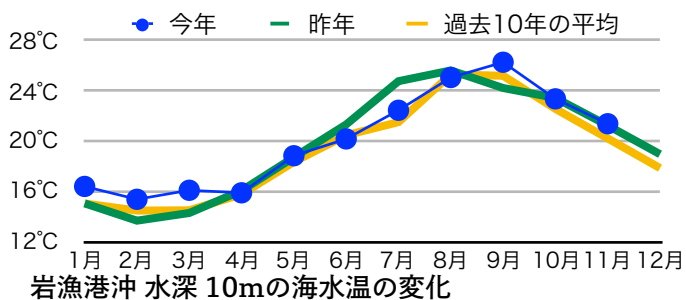
植物プランクトンの変動に注目

10月に3℃も急降下した海水温でしたが、今月は21.4℃と昨年とほぼ同じ値となりました。この後は、もっとも冷えこむ

2月へ向けて、海水温はどんどん低下することでしょう。植物プランクトンの定期採集では例年と違う傾向が見られています。毎年、植物プランクトンは春と秋に増加しますが、今年の春はあまり多くなりませんでした。一方、今月になって、本来は春に増える種類(右写真)が急増していることがわかりました。何が原因となっているのか、今後の調査に注目です。<データ提供：横浜国立大学>



植物プランクトン コスキノディスクス。「真鶴自然子どもクラブ」でも多く観察された。



真鶴の漁獲情報

バラエティに富んだ魚種、クロマグロも

先月の後半に引き続き、真鶴町漁協の定置網では、多様な種類の魚が水揚げされています。メアジ、ワラサ、カマス、ヤガラ等々、秋の深まるこの季節ならではの魚種です。海況によっては水揚げが少ない日もあるようですが、11月16日(土)には定置網にクロマグロが入ったそうです。クロマグロは国により水産資源管理のための漁獲枠が定められており、水揚げはされませんでした。リリースしたクロマグロは1tほどもいたそうです。

今回はクロシビカマスをご紹介します。炭で焼いたような真っ黒な体色から、相模湾沿岸では「スミヤキ」という呼び名で親しまれています。真っ黒な見た目に加え、鋭い歯を持ち、背骨(脊椎骨)以外にも細かい骨が皮の下にたくさんあります。そのためか、他の地域ではあまり取引されていませんが、真鶴～小田原周辺では好んで食べられていて、ソウルフードといえるほどに親しまれています。近年では人気が出てきて値段も上がり、今では高級魚並みの値段が付くようになりました。クロシビカマスは釣りで年中あがるそうですが、脂ののる秋から冬が旬のお魚です。塩焼きと煮付けにして、小骨に十分注意しながら、秋の味覚を美味しくいただきました。<情報提供：真鶴町漁協>



クロシビカマス(真鶴では「スミヤキ」(上)、鋭い歯(左))

町立遠藤貝類博物館 年末年始開館スケジュール

年内開館 12月27日(金)まで

令和2年開館 1月4日(土)から

※詳細は町立遠藤貝類博物館ホームページをご覧ください。

まなづる 海の月報は、町立遠藤貝類博物館 HPからダウンロードができます。プリントしていただいでるの掲示・配布歓迎です。